

学位請求論文審査報告要旨

2018 年 11 月 14 日

学位請求者 後藤 優子

論文題目 物語を断つ「視」の 20 世紀初頭精神

—青年におけるアナーキーとアマチュアの共振—

論文審査委員 金井 嘉彦

岡部 一興

糟谷 啓介

1. 本論文の構成

本論は、これまで日本の歴史、文化史、文学史において取り上げられることのほとんどない 5 人の人物、安井仲治(1903-1942)、ささきふさ(1897-1949)、渡辺温(1902-1930)、金子文子(1903-1926)、難波大助(1899-1924)に焦点を当てつつ、歴史が書かれることによって、逆に不在化されてしまう「歴史」を浮き彫りにし、日本近代を「再記述」しようとすることを目的とする。本論は、日本近代の「開化」から第二次世界大戦までの時期において、天皇を中心として求心的な社会形成の磁場が強まっていく流れの中で、そこから逃れようとする自由な精神の発露が、世紀転換期前後に生まれ 1920 年頃までに青年期を迎える都市の「観察者」のなかで先鋭化し、「アナーキー」と「アマチュア」の精神的共振という形を帯びて現れる様を「厚い記述」により詳述しようとするものである。本論文の構成は以下の通りである。

序章 20 世紀初頭精神の考察

はじめに

第 1 節 創出される「青年」

第 2 節 「個」のゆくえ

第 3 節 見神と死

第 4 節 煩悶する男子から都市の観察者へ

第 5 節 遠心力としてのアナーキー／アマチュア

第 6 節 方法論について

第 1 章 カメラ・オブスキュラの眼——近代アマチュアが有したポテンシャル——安井仲治(1903-1942)

はじめに

第 1 節 有限な生における自在

(1) 資本の潤沢と病

(2) 自治都市「大大阪」

(3) 阪神間モダニズム

第2節 アマチュアたること

- (1) 発生の背景
- (2) 「芸術」の支持
- (3) オルタナティブとしての関西

第3節 逆照射する他者

- (1) 労働者
- (2) 実験動物
- (3) 老画家
- (4) 女性

第4節 報国と写真家

- (1) 「芸術」の駆逐
- (2) 『王道楽土』

第5節 あらがう「視」

- (1) 半静物
- (2) ある銃後の表象

第6節 生きるために「みる」

第2章 まなざされるもの

第1節 近世の女性写真師が写した「男」

第2節 氾濫する「女」

第3節 不在のモダンガール

第4節 ダンスブームとダンサー

第5節 転落する女子学生

第3章 まなざす「女」——Spleen de Tokio 1930 の自照精神——ささきふさ (1897-1949)

はじめに

第1節 ふたしかな「私」の位置

第2節 断髪するとき

第3節 プロテスタント的精神——港都に射す光——

- (1) 洗礼と親密圏
- (2) キリスト教女子青年として
- (3) 共闘する男性たち

第4節 コンフォーミティ・夫婦・虚無

- (1) 万国婦人参政権大会と関東大震災
- (2) 馬脚
- (3) 「行乳薬求死」

第5節 「ただ見る」という行為

- (1) 窃視／傍観者
- (2) カメラ・オブスキュラと夢の知覚
- (3) 踊る彼女たちと踊らない「私」の solidarity

第4章 開港と国家売春

第1節 アメリカの要請に応える

第2節 ^{みよざき}港崎 遊郭

第3節 遊歩道・茶屋・チャブ屋

第4節 港と感染症

第5章 初期映画の衝迫と「彼女」たち——Incoherent な系譜——渡辺温（1902-1930）

はじめに

第1節 スクリーン・プラクティスとしての活動写真

- （1）ものがたられない映像
- （2）技術と評論
- （3）純映画劇運動／プロキノ
- （4）「いみじい夢」の奪還

第2節 「主義」から「趣味」へ

- （1）作家兼編集者の創作性
- （2）雑誌王国の凋落が生み出したもの
- （3）新時代の地方青年に期待する
- （4）哄笑する浪漫趣味者

第3節 兵隊の死——カタストロフ以前の「個」の死——

第4節 まったき「家族」の欠落——父子・母子・姉弟——

第5節 「シルクハット」／「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」

——港が媒介する関係——

- （1）買売春か恋愛か
- （2）「良妻賢母」でも「職業婦人」でもなく
- （3）ディエジェーシス——点晴をのこした——

第6章 二都港湾史

第1節 対抗する都市

第2節 近代化の先鞭——海から ^{おか}陸へ——

第3節 焦点のないヴィスタが意味するもの

第7章 都市をよぎる視線——揺籃の港都から死の帝都へ——金子文子（1903-1926）

はじめに

第1節 ものがたる「私」とはだれか

- （1）「懺悔」の内実
- （2）傾向映画の時代
- （3）テキストの亀裂

第2節 港都を移り住む家族

- （1）未来を臨まれた町
- （2）巡査と紡績工
- （3）寺町に住む

- (4) 丘のふもとの「学校」
- (5) 8歳の彼女についての値段

第3節 都市と政治

- (1) 写真の「怪」——読書する女性「犯罪者」——
- (2) 既遂か未遂か
- (3) 都市がみた「夢」

第4節 学知・女性・虚無

第5節 自由な死

第8章 ことばの獄

第9章 「視」の自律——青年は未来へとつらなる——難波大助（1899 - 1924）

はじめに

第1節 志士の後衛

- (1) 向山文庫と顕彰碑
- (2) 外様の位置
- (3) 理想主義と権謀術数

第2節 労働と懷疑

- (1) 「紙上遊戯」
- (2) 富川町スケッチ
- (3) 桜の山を越える兄弟
- (4) 白色テロルとコンフォーミティ

第3節 「女」から人間へ

- (1) 「淫売婦」とはだれか
- (2) ことばの宰領へのあらがい——囚われの女性と「青年」の solidarity——
- (3) 自由廃業の日——読書する遊郭の女性——

第4節 「大逆」の内実

- (1) 社会と狂気
- (2) 圍繞する「父」
- (3) 子孫崇拜

終章

参考文献

2. 本論文の概要

序論では、本論の目的、問題意識、方法論を説明する。後藤氏は、歴史が書かれることによって、不在化されてしまう「歴史記述」がもつ根本的な問題を指摘しつつ、日本近代史において不在化された「歴史」を浮き彫りにし、日本近代を「再記述」する点に本論の目的を置くと説明する。近代を「王政復古」から第2次世界大戦の開始直前までの1868年から1885年を第1期、1886年から1903年を第2期、1904年から1921年を第3期、1922年から1939年を第4期に分け、この第3期を、第1、2期と第4期における「求心」的な社会形成の磁場——固定化をうながす——に対抗するような「遠心」的「個」の働きが認められる時期と措定する。後藤氏は、「個」の発露が、とりわけ若年層に

において顕著であったことから、「青年」を一つのキーワードに挙げ、彼らが「アナーキー」と「アマチュア」の精神的共振を見せる点に焦点を当てるとする。それはまた同時に、この時代に噴出した近代化の矛盾、日本近代における虚無の淵源を凝視する自律的な視覚を持つ瞬間であるとし、それを個をからめようとする社会の大きな「物語を断つ視」ととらえる。このような本論の目的に向けて後藤氏は、クリフォード・ギアツの「厚い記述」を用い、ミクロストリアを重ねることで個別から全体を浮き彫りにする手法を用いるとする。

第1章では、日本近代における行為としての「写真」の可能性を象徴する人物として安井仲治(1903-1942)を扱う。本章は、この時代の美術史ではなく精神史のなかに、安井の存在をとらえようとする新たな試みである。第1節では、彼の出生地である大坂の近世からの精神的遺産と近代の都市的性格を検証し、そこにたったひとつの「中心」におちこまないオルタナティブな「精神」、アマチュア精神へのつながりを見る。第2節では、アマチュアの発生と関西アマチュアのオルタナティブとしての性格を概観し、第3節では安井がアマチュアであるがゆえに規範的なものから外れたものを映しえた点を他者の尊厳に光源を発する作品を分析しつつ描く。第4節では、1930年代に国際的な孤立を深めていく日本が国策として写真を活用しようとし、その中でアマチュア写真家が排除されていく状況下で、アマチュア写真家が示した内なるアナーキーをあぶりだす。そして第5節では、政治に巻き込まれざるを得ない時代にあつて安井が才知を働かせ、戦争の開始という最悪の事態に直面しても、写真表現が完全に閉塞してしまわないよう自律の道をさぐり続けた様子を描く。第6節ではアマチュアであるからこそ、有事においても陥穽におちこむことなく、未来を見通す眼をもちえた点を指摘し、安井において近代アマチュアのポテンシャルが開かれている様子をまとめる。

第2章は本論の取りあげる5人が成人するころ登場し、つかのま社会をにぎわせながら、1931年の満州事変以降、ファシズムの台頭とともに姿を消していく「モダン・ガール」を扱う。とりわけ第3章で取り上げるささきふさが「モダン・ガール」と呼ばれたことから、この章は第3章の前史の役割を果たす。そこでの問題意識は、一方的にまなざされる機会の多かった「女」の意思がどこに存在したか、また、彼女らがいかに主体としてまなざしたかにある。第1節では「男」の写真を撮った日本初の女性写真師島隆を、まなざす女性として見る。第2節はまなざしを投げかけられるばかりでない主体的にまなざす「女」の出現がささきふさにある点を論ずる。第3節では「モダン・ガール」の表象を、北澤秀一の「近代の女——日本の妹に送る手紙——」(1922)「モダン・ガール」(1924)、新居格の「モダン・ガールの輪郭」 大宅壮一の「百パーセント・モガ」(1929)を取り上げつつ概観する。第4節ではモダン・ガールと結び付けられて語られる存在としてのダンサーを論じる。第5節では、モダン・ガールを取り巻く状況として、転落する「女」の言説が繰り返され、進行中の都会的・西洋的モダンをゆきすぎたものとして「内なる危機」が叫ばれていた状況を概観する。

第3章は、未婚時は「モダンガール」、結婚後は「大手出版社の編集者の妻」と称され、その活動をすべて「余技」とされ低い評価しか与えられなかったささきふさ(1897-1949)を取り上げ、その低評価の根底にジェンダー・バイアスと純文学至上主義的「文学」批評のドミナンスの問題があることを示し、同作家の再評価を図る。第1節では、末子であり養女であった経験、第2節では、モダン・ガール表象に結びついた彼女の行動としての断髪を扱う。第3節では、従来顧みられることのなかった、キリスト教信仰がささきの書くことの契機となった点、その過程で社会主義との接触があった点を明らかにする。第4節では、外遊、震災を経てコンフォーミティに正面から反旗をひるがえすことなく、普遍的な知の総体を尊重しうる理性的なまなざしを得て、結婚に至る経緯を詳述する。ここで

触れられる芥川との関係、養父の自殺は従前指摘されることのなかったことで興味深い。第5節ではささきの作品に見られる物語を脱臼させるような、多元的でありながら対象と切りはなされた「視」、見るとともに見られることを意識した二重の「視」がある点と一筆書きのような推敲をしない書き方に「正典」への叛意を見出し、ささきとは対照的に新感覚派を評価する文芸批評上のドミナンスの問題をあぶりだす。

第4章は、本論においては青年を育む場として都市が重要な役割を果たすことから、帝都と並び重要な意味を持った港湾都市横浜の歴史を概観する。第1節では、従前注視されてこなかったこととして横浜開港交渉の場で国家売春と宗教の自由が同様に容認された歴史を資料と共に示し、第2節ではそのようにして設置された遊郭からチャブ屋へと発展していった歴史、梅毒が蔓延することになった状況とその対策を描く。

第5章では、これまでささきふさと同様文学史には名を刻まれることなく、主たる活動の場であった雑誌『新青年』の作家兼編集者、探偵小説作家として語られるにすぎなかった渡辺温を取り上げ、それまでにないジェンダー観を持った点、初期映画にインスパイアされた、「みじかい形式」へのこだわりを見せた点、支配的な表現からの「解放」を模索とした点から再評価する。第1節では、渡辺の初期映画体験と彼の作品との関係を論じ、エミール・コールの線画映画の脈略のなさ、短さに渡辺の作品の源を見るとともに、その後の純映画運動の発展に渡辺が当初感じていた映画の魅力や可能性が消されていく様を見ていたこと、そこに視点の馴致が行なわれる危機感を感じ取っていたことを論ずる。第2節では、渡辺が編集に関わる雑誌『新青年』を発行していた博文館ができるまでと、堅実な地方青年向けの雑誌であった『新青年』が震災後に読者の対象を、農村の青年層から都市文化を享受する学生や若いサラリーマン層へと転換していく中で、探偵小説に重きを置いていった様子を描く。第3節では、物語の完成を志向しない、物語の「解放」へと向かう作品として渡辺の「兵隊の死」を取り上げ、詩的表現と映画表現のあいだで結晶した稀有なこの創作の中心に、時相や兵役経験が彼に感じさせた不条理があると論ずる。また渡辺が近代的「家族」の規範におさまろうとはしない家族を描く例として「父を失う話」(1927)、「或る母の話」、「可哀相な姉」(1927)を取り上げる。第4節では、渡辺の「シルクハット」と「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」という類似した話を取り上げ、内向きに物語として閉じてしまうのではなく、初期映画のように見る者に対し外向きに開かれている物語である点を分析する。

第6章もまた第4章同様横浜の発展史を扱う。第1節では、対抗する港湾東京と横浜が、当初は想像し得なかった相補関係を得て、新たに並びたつ国際貿易港として発展していく様子を描く。第2節では、近代において横浜が埋め立てられて開港する前史として吉田勘兵衛と吉田新田の開発の歴史を描く。第3節では、「波止場を中心として市街地を「異国人町」と「日本人町」に二分する方針が、以後の横浜の都市構造を大きく規定していったこと、江戸のような都市計画によらず、そのつど事物が歴史的に派生するように成っていき、しかもそれが海のほうを意識した作りになっている特異性を指摘する。

第7章は、大逆罪で死刑となり、手記『何がわたしをこうさせたか』(1931)で関心を集めた金子文子(1903-1926)を扱う。後藤氏は、この手記が金子のイメージを決定づけ、テキストが一人歩きをしているとして、固定化された金子のテキストおよび生に対する見方を開くべく、これまでとは異なる角度から金子の生の軌跡を考察するとともに、この手記の本文がどこからどこまでが彼女の自筆なのか判読不能である点を明らかにする。第1節では、金子の手記の出版が金子自身の遺志であった

ことに疑いの余地はないものの、古田大次郎の『死の懺悔』(1926)がベストセラーになったこと、1927年に発表された藤森成吉の戯曲『何が彼女をそうさせたか』が影響を与えた点、遺稿に改竄の痕跡が見られる点を指摘しつつ、物語る「私」とは誰かについて考察を加える。第2節では、港都を移り住む金子家の歴史と横浜との関係を論じ、第3節では、金子に付されることとなった「大逆罪」の背後に存在する日本の近代都市と政治に関する問題、とりわけ天皇制原理主義のもとで供犠としての刑罰が要請されたこと、さらに彼女自身が最終的に既遂性を認めた意味を再考する。第4節では、金子に与えられなかった教育とその結果として選ばれた「みじかい」形式の言語表現として詠歌を考察する。第5節では彼女の死を、金子が愛読していたミハイル・アルツィバーシェフの『最後の一線』との関わりから考察する。

第8章は、本論で扱う5人に共通する時代の動きの中に深い虚無を見つめる視、本論のタイトルにある物語を断つ視とは対極にある、「永遠の今」あるいは「中今」という思想について論じる。「中今」とは、文武天皇の宣命に由来しており、「現在を過去と未来との中と観ずるもの」ながら、「今」のうちに永遠をふくむものを指す。後藤氏は、「中今」の解釈は諸説あり、絶対的な「中今」なるものが存在するのではないにしても、日本文化のうちで現在をもっとも重んじ、未来への視座を容易に持ちえなく機能する時間感覚が存在してきた点を指摘し、その例として、近代に分断された「個」のありかたへの反発や、理性の光に対する嫌悪と同時に、全体性を回復しようとする心性を示す三井甲之の『しきしまのみち』(1934)を挙げる。後藤氏は、このような心性がもたらす、延々と続く区切りもなければ出口も見出せないような「ことばの獄」に陥った築地藤子に対し、金子文子の歌には中今の陥穽から自由たらんとする姿勢が見られる点を指摘する。

第9章では、「大逆事件」の一つである「虎の門事件」の犯人として一般に知られている難波大助を、いかなる組織にも属さず、仲間ももたずに個人で決行に出たその個人性に特異性があるとし、難波がただひとり先鋭な行動をすすめた理由に、彼の「視」の自律がかかわっている点を論じる。第1節では、難波が受け継いだ家の志士的精神と家がそれまで置かれてきた長州の精神の伝統を詳述し、近代的自我や青年の煩悶に遇すことない前世代を描く。第2節では、難波がテロリストとなった経緯として、議会制政治への幻滅、ロシア・テロリストへの共感、幸徳事件判決への憤慨、同志の物足りなさへの憤慨を見るほか、言論による抵抗の不可能性の実感、生の尊厳を奪われている労働者としての経験を見る。第3節は難波が学生をやめ労働者の世界に入っていく契機となった娼婦体験を取り上げ、その中で男性優位の士族の家に生育した難波が示した女性を平等な人間として見るまなざしの特異性について考察する。第4節では、当時の裁判の内実を詳らかにし、虎の門事件に関する動機として、幸徳事件の真相や、河上肇の「断片」を読んだことが行動の直接の引き金として重要であるとこれまででは考えられてきたが、死刑決定後に生の最終局面で語られた「子孫崇拜」こそ、難波における精神の到達点として認められるべきであるとする。

3 本論文の成果と課題

本論文の第一の意義は、本論の企図そのものにある。本論は、歴史が書かれることによって不在化されてしまう「歴史」を浮き彫りにし、日本近代を「再記述」しようとする意図のもとに、天皇制を核にして求心性を強めていく社会形成の磁場の中で、そこから逃れようとする自由な精神の発露が「青年」に存したとして、安井仲治、ささきふさ、渡辺温、金子文子、難波大助の5人に焦点を当て、彼らが、体制の中に本質的に存在する虚無を見据え、徹底して醒めた「理」に基づいて抗い、「アナー

キー」と「アマチュア」の精神的共振を見せる様を「厚い記述」により描き出す。後藤氏が明らかにしようとするのは、歴史が抑圧し、見えにくく、語りにくくしたものであるがゆえに、それを白日の下にさらすのは容易なことではない。そもそも本論が取り上げる 5 人には共通項と呼べるものはない。それを後藤氏は、「青年」、「アナーキー」と「アマチュア」、「自律的な視」といった後藤氏独特の概念を用いることで、5 人の背後にかすかに横たわる共通した時代精神を浮かび上がらせていく。加えて、5 人が生きた家庭、5 人の思想、作品、彼らが生きた時代とそこに至る歴史を丹念に描くことで、その中に後藤氏が「共振」と呼ぶかすかな形でようやく感知可能となる精神を炙り出すことに成功している。このような論文の性質上 5 人の関係が見えづらい点や、随所に挟まれる様々な歴史が本論の全体像を見えにくくしている点は否めない。しかしそれは、歴史が語られることによって語られない部分を生み出すように、後藤氏がそれらをまとめてある「物語」にして語ってしまったときに逆にそこから抜け落ちてしまうものが出ることへの警戒であり、歴史記述に根本的に付随する問題を避けるために後藤氏が意識的に採った手法であると考えべきなのであろう。

本論文の第二の意義は、本論のスケールの大きさと射程の広さにある。本論の核として扱う 5 人については、彼らの思想や書いたものを当然のことながら大きく取り上げるが、後藤氏はそれに加え、彼らの家庭の歴史、先祖の歴史、家族が営んだ職業の歴史、家族が住んだ土地の歴史、彼らが生きた時代に特徴的な概念の歴史、彼らが関心を示したものに關する歴史といった、彼らを取り巻くより広い歴史を、丹念に、独立した歴史として描く。これにより後藤氏は、個々人の歴史を扱いながら、重厚な大きな歴史を読む者の前に現前させる。本論のスケールの大きな、また射程の広い歴史記述は、時間・空間的にさらに広げて適用しうるもので、後藤氏の今後の研究の広がりを感じさせるだけでなく、歴史研究全般に新たな可能性を開く意義を持つ。

本論文の第三の意義は、後藤氏が独自の観点と新しい手法を用い、これまで十分な光を当てられることのなかった 5 人に、払われてしかるべき評価を与えている点にある。第 1 章では、写真の分野で論じられることはあるものの、それ以外では取り上げられることのなかった安井仲治を、オルタナティブの視点を提示するアマチュア精神の実践者として再評価している。第 3 章では、随筆、小説を主とした良質な短編を数多く残しているにもかかわらず、日本文学史上の分類「新興芸術派」に押し込められた結果として無名なままにとどまるささきふさを、これまで注意を払われなかったキリスト教との関係や芥川との関係を指摘しつつ、まなざされるだけでなくまなざすこともできた女性ととらえ再評価する。第 5 章では、これまで雑誌『新青年』の作家兼編集者としてのみ評価されてきた渡辺温を、それまでにないジェンダー観を持った点、初期映画にインスパイアされた、「みじかい形式」へのこだわりを見せた点、支配的な表現からの「解放」を模索した点から再評価する。第 7 章では、手記『何がわたしをこうさせたか』（1931）でもっぱら関心を集め、社会的殉教者としてしか語られなかった金子文子を、彼女が育った横浜という地との関係に焦点を当て、移動と循環の中で生きる都市の人間として読み直している。第 9 章では、家族の愛が足りなかったためテロリストになったといった形で家族の物語に回収されてしまうことが多い、またテロリストという大きなくくりの中でしか注意の払われなかった難波大助を、士族としての背景を持ちつつも新しいジェンダー観を持っていた点や、なにものにも属さずに行動をした彼の特異性をもとにとらえ直している。

本論文の第四の意義は、本論がすぐれたジェンダー論となっている点にある。日本近代史が歴史として書かれる中で不在化された歴史の一つとして後藤氏はジェンダーを取り上げる。写真家安井や作家渡辺温、ささきふさといった芸術と関わる人物のみならず、いわゆる政治的活動家の金子や難波を

ジェンダーの観点から見る見方は新しい。とりわけまなざされる対象としての女性が主体としてどうまなざしたかに関する論考は歴史を見直す切り口として斬新といえる。後藤氏は個人にだけでなく、社会の制度、社会の在り方にもジェンダー的関心を向ける。本論がキリスト教と女性の関係、横浜の発展と女性、売春制度を扱うのはそのような問題意識によるものである。

本論文の第五の意義は、本論文を支える膨大な資料にある。当時の資料に丹念にあたるほか、これまで参照されることのなかった多くの資料や現地調査で得られた知見を用いることにより、個々の事象に新しいレファレンスを与えている。若干の例を挙げるならば、金子文子と横浜との関係については従前注意が払われてこなかったことで、それを詳述している点ですでに大きな意義があるが、金子が手記で父と叔母が移った先を「住吉町」としているのを、似た町名が誤って記憶されたもので、正しくは「末吉町」であることを突き止めたのは、新しい発見である。ささきふさについては、キリスト教との関係を古い資料を用いて明らかにしたほか、これまで指摘されることのなかった養父の自殺の事実を突き止めたのは大きな発見といえる。難波大助について、古い資料にもとづき、難波の曾祖父からの士族の系譜の中に位置づけた意義は大きい。

その一方で、本論文にはいくつか問題点もある。第一は構成上の問題で、序章において説明されている方法論や目的を理解して読み進める読者にとってさえも、様々な歴史が独立して語られるように見える本論文に戸惑いを禁じ得ない。本論で取り上げる5人がどのように関係し、彼らが本論の途中に挟まれる歴史とどう関係するのかを序論でもう少し丁寧に説明していれば、そのような印象も和らいだかもしれない。第二の問題点は、語の定義にある。「物語を断つ視」、「アマチュア」、「アナーキー」、「理」など本論の核をなす概念について十分に定義がなされないまま論が進められている部分がある。論を読み進めば説明があることであっても、あらかじめ十分な定義があれば、より読みやすい論文となったように思われる。問題の第三は、本論で扱う5人の関係性に関わる。本論を読む者は誰でも本論のテーマを論証するのにこの5人でなければならなかったのか、ほかの誰かも含めうるのではないかという疑問を抱く。本論の意図からすれば、おそらくこの5人でなくてもよかったのであり、この5人も日本近代が示した精神のあらわれの例でしかないのだろうが、その点に関する説明をどこかに入れておいてもよかったかもしれない。第四の問題は本論の問題設定に関わる。本論が設定する天皇制を核にして求心性を強めていく社会形成の磁場と、そこから逃れようとする自由な精神の発露という対立は、すでにある歴史から予想されるもの、見てとれるもので、そのような図式的対立の中に5人の「青年」を置き、見ていく見方には歴史還元主義に陥る可能性がある。上述したように本論は「物語を断つ視」、「アマチュア」、「アナーキー」といった後藤氏独自の概念を用い広く自由な精神の発露を見るもので、政治的反抗のみをとらえる安易な論ではないが、方法論として歴史還元論にどのように抗するかについて序論で触れておいてもよかったかもしれない。

以上のように本論文にはいくつか問題点が見られる。とはいえ、本論文の価値を損なうものではない。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者後藤優子氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終試験結果の要旨

2018 年 11 月 14 日

学位請求者	後藤 優子
論文題目	物語を断つ「視」の 20 世紀初頭精神 —青年におけるアナキーとアマチュアの共振—
論文審査委員	金井嘉彦、岡部一興、糟谷啓介

2018 年 10 月 17 日、本学学位規則第 8 条第 1 項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者 後藤優子氏の博士学位請求論文「物語を断つ「視」の 20 世紀初頭精神—青年におけるアナキーとアマチュアの共振—」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、後藤優子氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。